

## 月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-10

約束通り、横田が画商の朝倉と連れ立って『こはる』に来店したのは、明け方から降っていた雨が止んだ九時過ぎだった。

霜月も後半に入った月曜日で雨模様にもかかわらず、半分ほど席は埋まっていた。

奥まった席に通された二人のテーブルへ最初に着いた洋装でロングヘアの若いホステスは、自然体の笑顔で、「ヒデコと申します。どうぞお見知りおきください」と挨拶をしてから、二つ折りに広げた温かいおしぼりを渡し終えると、名刺を差し出ししながら、いかにも申し訳なさそうな顔で、

「ママは他のお客様のお相手をしておりますので、少々お待ちください。お飲み物はいかがいたしましょうか？」と言った。

「私はジントニック、君は……」

「ホットワインはできるかな……」と朝倉が聞くが早いか、「できるに決まってるじゃないか。つまらんことは言わないでくれよ！」と横田は急に声を荒げた。

「すまなかったね！ヒデコちゃんも好きな飲み物を頼んでね」と朝倉は謝って、横田の言い種を軽く受け流した。

ヒデコが右手を挙げると、すぐに黒服が用件を伺いに来て、ヒデコの傍らに跪いた。

黒服が立ち去ると、

「一階の花屋には何度か来たことはあるけれど、ここは初めてだね」と朝倉はふっくらとした小鼻をびくつかせて、絵画の値踏みでもするかのように店内を見回した。

目の前にいるお客の情報は知らされていたが、ヒデコはそんな素ぶりを見せないで、「私もホットワインをいただくことにしました。ありがとうございます」と言って、剣呑な雰囲気になりそうな塩梅を掬い取った。

「いいね！いいね！今度来たときは、ヒデコちゃんを指名させてもらうよ」と朝倉は弛んだ頬の筋肉を震わせて言った。

「初めて見る顔だけど……」と横田も、ヒデコに好奇心がそそられたように訊ねた。

「常勤で働かせていただいています。お客様のお顔は存じ上げております」

「常連客でもあるまいし、ホステスさんたちも、これだけいれば……、ねえ！」と朝倉は言っ、ヒデコに同意を求めた。

「お二人のお席につかせていただいておりますのも、ママのお気遣いとお察しく下さい」

ヒデコは自負心を匂わせて伝えると、席の近くのモダン花器に生けられて、しっとりと輝いている中輪の赤と白のダリアの花弁に目を向けていた。